

亡命ロシア知識人としてのP. A. ソローキン*

—〈善く生きる〉ための社会学の構想—

吉野 浩司**

P.A. Sorokin as A Russian Exile Intellectual: The Way to Construct a New Sociology of “Well-Being”

Koji YOSHINO**

はじめに

本稿の目的は、1つの大きな仮説を提示することである。その仮説というのは下記のとおりである。

仮説 19世紀末から20世紀初頭のロシアの社会学には〈善く生きる〉ための社会学の萌芽が存在しており、それらはロシア革命後、亡命知識人の手によって中欧・東欧に伝えられ、ひいては現代欧米の社会学にも少なからぬ影響を与えている。

ただし、この仮説を検証することが、本稿の目的というわけではない。検証作業には、それこそ今後数年がかりの、国際的な共同研究を必要とするだろう。ここではその検証作業の前段階として、その工程表を描き出すことを目的としている。

〈善く生きる〉ための社会学とは、いかなる学問なのか。また、なぜそれが必要なのか。まずはこの問いに答えておかなければなるまい。社会学はこれまで社会のネガティブな側面を取り除くことに忙しく、ポジティブな側面を増大させる取り組みは、後回しにされてきた。例えばギデンス『社会学』の最新刊の目次を瞥見してみると、犯罪と逸脱、テロリズム、リスク、不平等、貧困、社会的排除などネガティブなテーマが並んでいることに気づくであろう。それとは対照的に、人間のポジティブな側面といえは、「親密な関係性」、「健康」、「福祉」への論及を、かろうじて挙げられるぐらいである (Giddens ed., 2017)。

社会学が過度に科学的であろうとした結果、倫理的問題を意図的に排除してしまったこと、あるいは社会学内部で扱われていた福祉研究が制度的に社会学から切り離されたことなどが、その主な理由として挙げられよう。そのことは現代の標準

的概説書のトピックをのぞいてみても歴然としている。

しかし人間社会には、楽しさや喜び、生きがい、親切、愛といったポジティブな側面も確かに存在している。むしろそうしたポジティブな社会を求める気持ちは、人間に本来的に備わっているといっても間違いないだろう。これらポジティブな側面のメカニズムを解明し、人間社会の福祉に役立てること、これも社会学にとって必要な課題のはずである。他の分野の動向を見てみると、現在、ポジティブ心理学やスピリチュアル・ケアなどはすでにそうした研究に着手し始めている。また一般的な関心事としても、同様なことが言えるだろう。例えば国内的には都道府県別幸福度ランキング (日本総研) が、また国際的にも世界幸福度報告 (World Happiness Report) が、ポジティブな社会への人々の関心の高さを示すものとして指摘することができる。

はたして社会学は、そうした社会的、学問的なニーズにこたえているのであろうか。2000年あたりから、徐々にそうした動きが現れてきたことは事実である。一例を挙げると、アメリカ社会学会に新設された「利他主義、道徳性、社会的連帯」セクション (以下「利他主義セクション」と略) の取り組みがある。同セクションが目指しているのは、社会学が科学性を追及するあまり見失ってきたとされる、道徳性、社会的連帯、そして利他主義という課題を、もういちど現代の社会学のなかに蘇らせようとすることにあった (Jeffries ed., 2014)。まさに社会学が人間のポジティブな側面の増進と、〈善く生きる〉ための社会の実現とに取り組もうとしている1つの表れであるといえるだろう。

* Received January 16, 2019

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

1. 仮説形成にいたるまでの経緯

こうしたことを考えてみようとするきっかけを作ったのは、これまで筆者が主たる研究対象としてきた、P.A.ソローキンの学問と思想、そしてその生涯と深く関わっている。筆者はこれまでソローキンを中心に、20世紀のロシアとアメリカの社会学史を専門的に研究してきた。それらは拙著『意識と存在の社会学—P.A.ソローキンの統合主義の思想』(吉野、2009)においてまとめられている。これはソローキンの全ての著書および関連著作を検討した上で、「統合主義 (integralism)」

という彼の的方法論の枠組みの中にそれらを位置づけようとしたものである。本書を完成し



2015年1月4日ソローキン「遺産」研究センターでのラウンドテーブル (シクティブカル)

てからは、世界の学者たちとの交流によって、その自らの知見をよりいっそう深めていくという方向で研究は進められてきた。2014年末から年明けの2015年1月にかけて行った、ロシアでの学術調査では、モスクワの若手研究者と会い、またソローキンの出身地域であるシクティブカル (Сыктывкар) ではソローキン研究所のラウンドテーブルに参加することができ、ソローキンの生家博物館への訪問もかなった (吉野、2016)。このロシアでの調査で分かったことは、利他主義こそがソローキン最大の社会的遺産である、というロシアの研究者の間での合意である。筆者にとってこの視点は、実に意表をつくものであった。ソローキンを深く研究してきた、フォード (Joseph B. Ford, 1917-2009) やコーザー (Lewis A. Coser, 1913-2003) やジョンストン (Barry V. Johnston, 1942-2011) にしても、おそらくは同様の印象を抱いたことであろう。

もちろん筆者自身、ソローキンの愛や利他主義研究の検討を怠ってきたわけではない。上掲拙著においては、先行研究では取り扱いに困っていた、利他主義や愛に関する研究をソローキンの社会学体系の中に定位できた。そのことが、拙著のささやかな成果の1つであるとさえ考えている。また、それに先立つ論文では、戦争の解決の1つの手段として、利他主義を論じたりもしている

(吉野、2006)。さらに、その一方で、浄土真宗の妙好人を扱った「妙好人は体制に順応するだけの存在か」(吉野、2014) では、明確にソローキンを意識しつつ、利他主義の日本的展開を試みている。しかしそれでもなお、ロシアでは、利他主義こそがソローキン最大の社会的遺産であるともなされているという事実と直面し、筆者はそれをたいへんな驚きをもって受け止めた。

拙著の枠組みに大幅な改編が必要だとの認識に筆者がいたったのも、そのころからである。まずはロシア時代の著作の再検討から取り掛かることにした。その成果として、ソローキン最初期の論考であるトルストイ論を邦訳してみたり (Сорокин, 1914)、その中に利他主義の萌芽を突き止めたりという、新たな研究に足を踏み入れた (吉野、2018a)。そしてようやくソローキン最大の貢献は利他主義研究にあるという観点から、実際に、アメリカ社会学に設置された利他主義セクションの成立過程を分析してみるという課題にとりかかったところである。そうした観点からすると、やはり利他主義セクションへのソローキンの影響力がそうとう強いということが判明した。このセクションの立ち上げに関わった多くの研究者が、大なり小なりソローキンの利他主義研究に依拠した研究を行ってきた学者だったからである (吉野、2017)。

ここ数年の研究は、そのことを裏づけるという作業に徹しているといっても過言ではない。ロシアの各地域 (モスクワ、ベテルブルク、ボログダ、ヤクーツク) やチェコやイタリアでのアーカイブ調査や研究者との学術交流に重点を置いた研究活動を、積極的に重ねてきた (吉野、2017、2018b)。それによって、ロシアから亡命期のソローキンの足取りをつかむことができた。このようにして最初期のロシアから、亡命生活を送ったプラハ、そして中期から晩年にかけてのアメリカまでの、ソローキンの全生涯を追いかけてきた結果、ようやくそのことの現代的な意義が見えてきたところである。それが今回提示しようとしている仮説として結実している。

その一部は、2018年7月に、ロシアのヤクーツク (Якутск) で開催された国際学会 (東北アジア学会) で発表された。筆者はサンクト・ペテルブルク大学准教授ロマノソーヴァ (Марина Васильевна Ломоносова) と、ロシア科学アカデミー研究員のドラゴフ (Александр Юрьевич Долгов) と共同で、ロシア社会学の欧米社会学

への貢献に関するセミナーを開くことができた (International Conference at Yakutsk, Association of North-East Asian Cultures, 2018/7/14)。ロマノソーフはソローキンのロシア時代とアメリカ時代の社会学思想の関連性を、ドラゴフはソローキンの利他主義研究と現代のポジティブ心理学との接合に関する発表をそれぞれ行い、座長となった筆者は両者をつなげるべく亡

命ロシア知識人としてのソローキンの役割に関する発表を行った。それによりソローキンがロシア時代に持っていた利他主義研究のアイデアをアメリカで開花させたことを、実例として示すことができた。こうした段階を経ることによって、確かにソローキン社会学の現代的意義は、利他主義にこそあるのだということが確信できるようになった。



(写真：左より筆者、ドラゴフ、ロマノソーフ)

しかし、現地調査による恩恵は、それにとどまるものではなかった。ロシアで生まれ1920年代にロシアからチェコを経てアメリカやフランスに渡ったソローキンを含む社会学者たちは、かなりの数にのぼる。しかもとりわけプラハに渡った亡命ロシア知識人が、チェコの文化や学問に与えた影響が極めて大きかったことにも気づかされた。それらを追跡調査していく中で出会った研究者たちとの学術的交流が、本稿で提示したい仮説の形成に大きく寄与しているのは、まぎれもない事実である。ロシアや中欧・東欧圏には〈善く生きる〉ための社会学の萌芽があり、それらはその後の欧米の社会学にも影響を与え現在に至っているのではないか。この仮説にあるように筆者は、一人の亡命ロシア人社会学者ソローキンの研究から、ようやく〈善く生きる〉ための社会学の構想というより大きな課題にまでたどり着くことができたのである。

2. 先行研究

もちろん亡命知識人の先行研究は、それだけでも多岐にわたる膨大な蓄積を有している。そればかりか、ロシアの宗教・思想・哲学、チェコの哲学・社会学、あるいはアメリカの社会学史などの個別の研究蓄積となると、それこそ枚挙に暇がないほどである。議論を狭めて亡命ロシア知識人による世界の社会・人文科学への影響を論じた研究に限定したとしても、例えば言語学や文学につい

ては一定の成果が挙げられている。語学の点でさえ研究への負担が予想される東欧の社会学史についても、石川晃弘『マルクス主義社会学—ソ連と東欧における社会学の展開』(1969) などユニークな研究が存在している。さらに本仮説に比較的近い個別研究としては、後に亡命ロシア知識人となる「道標 (Бези)」の同人たちや、プラハ学派を形成する言語学者ヤコブソン (Roman Osipovich Jakobson, 1896-1982)、あるいは文学者ナボコフ (Vladimir Vladimirovich Nabokov, 1899-1977) などに関する研究がある。彼らの事跡については、邦訳があるほか、高水準の研究成果が出されている。他方、アメリカの亡命知識人論については、フェルミ『二十世紀の民族移動』(1972)、コーザー『亡命知識人とアメリカ』(1988)、ジェイ『永遠の亡命者たち—知識人の移住と思想の運命』(1989) の他、国内の研究でも前川玲子『亡命知識人たちのアメリカ』(2014) などがある。加えて亡命知識人の二世による社会学的営為に関しては、矢澤修次郎『アメリカ知識人の思想—ニューヨーク社会学者の群像』(1996) がある。亡命知識人に関するユダヤ系学者の研究について、マンハイム (Karl Mannheim, 1893-1947) やルカーチ (Lukács György, 1885-1971)、あるいはフランクフルト学派に関する社会学的研究に見られるように、数多く出版されている。

ただ、それらを一本の糸でつなぐような研究と

なるとどうだろうか。それについては、いまのところ存在しないというのが現状だろう。すなわち、ロシアや中欧・東欧圏からの亡命知識人が、どのような知的背景を持ち、受入先の国で彼らがどのように受容され、定住地の社会学に対してどのような影響を与えたのか。またそれらがどのような形で現代社会学の中に反映しているのか。あるいはしていないのか。そうした社会学思想史の一貫した流れを追うようなテーマは、ごくわずかであるといわねばならない。ましてや彼らが意図するとせざるとに関わらず持っていたと思われる共通主題の1つ、〈善く生きる〉ための社会学の構想というものを、明らかにしようとするような総合的な研究は、皆無であると断言できるだろう。

しかしながら、本仮説の検証にとって、たいへん好都合な先行研究も存在する。ここでは次の3件を挙げておこう。1つは先述のロマノソヴァが、ペテルブルクのプーシキン記念館で行ったアーカイブ調査とその紹介がある。彼女は同記念館の書庫に眠っていた亡命社会学者ソローキンの初期の未発表作品群を発見し、それが晩年のアメリカでの利他主義研究につながるものであったと結論した（Ломоносова, 2016）。2012年にアメリカ社会学会に利他主義セクションが新設されたが、その源泉の1つが革命前のロシアにあったことを明らかにしたことで、彼女の仕事は社会学史の分野では大きな発見となった。

2つめはより広範にわたる中欧・東欧圏の社会学に関するものとして、ヤナーックが編集した『中欧社会学の制度化のはじまり』（Janák et al., 2014）を挙げるができるだろう。20世紀前半のチェコスロヴァキア、ハンガリー、ポーランドの社会学を総合的に論じたものとして、きわめて高水準の研究成果である。3つめは、直接に参考とするというよりは、各国の社会学史の基礎文献として便利な、2014年よりPalgrave Pivotから刊行が開始されたSociology Transformedシリーズを挙げておきたい。これまであまり知られてこなかったロシア、チェコ、ハンガリー、ポーランドといった国の社会学史の概要を掴み取ることができるようになっている。

3. 〈善く生きる〉ための社会学構築のための3つの課題

本稿で紹介している仮説が、どのようにして生まれてきたのかについては、以上のところでほぼ明らかになったであろう。そこで本節では、「19

世紀末から20世紀初頭のロシアの社会学には〈善く生きる〉ための社会学の萌芽が存在しており、それらはロシア革命後、亡命知識人の手によって中欧・東欧に伝えられ、ひいては現代欧米の社会学にも少なからぬ影響を与えている」という仮説を検証するにあたって、ぜひとも解かれなければならない論点を、3つにしぼって整理しておきたい。ロシアの思想と社会学について、それから亡命知識人の事跡について、そして最後にそれらの欧米社会への浸透について、この3点である。

第一は、〈善く生きる〉ための社会学の源流としてのロシア思想を突き止めることである。特に19世紀末から20世紀初頭に流行した、「ソボールノスチ（соборность）」というロシア正教由来の概念が注目に値する。一般にソボールノスチは靈的共同体あるいは全一性などと訳される。その特徴として挙げられるのは相互的な愛、祈り、統一性、不変性、真理、そして自由などである。ソボールノスチを主唱する代表的思想家ホミャコフ（Алексей Степанович Хомяков, 1804-1860）である。彼にとってそれは、ロシアの農民と農村の共同体を理想とし、連帯と調和のとれた生き方を概念化したものである。利他的諸個人からなる共同主観性を前提とするこのソボールノスチ概念の影響力は、広く哲学、文学、社会学といった分野にまでおよんだ。ソローキンの著作にも頻出するトルストイ（Лев Николаевич Толстой, 1828-1910）やクロポトキン（Пётр Алексеевич Кропоткин, 1842-1921）といった思想家たちにもそれは受容されている。

もちろん近代欧米の思想の、ロシア思想への影響は、他方においてかなり広範かつ深甚であったといわねばならない。19世紀後半のヨーロッパ発祥の人文・社会科学に対しては、貪欲に摂取された。ロシア思想史においては、いわゆる「西洋派（ザパードニキ=Западники）」という知識人の一派が現れる。その意味ではホミャコフのいうソボールノスチというのは、ロシア正教由来の思想と、西洋思想との深刻な対立の中から、より普遍的な観念へと昇華されていくことでできあがっていった概念であるといってもいいかもしれない。ちなみにホミャコフの思想はベルジャーエフ（Николай Александрович Бердяев, 1874-1948）を通じて、亡命国フランスをはじめ、世界各国へと伝わっていくこととなる。またソボールノスチ概念を愛用したフローレンスキー（Павел Александрович Флоренский, 1882-1937）の著

作に感化された哲学者ロスキー（Николай Онуфриевич Лосский, 1870 - 1965）も、亡命先でソポールノスチをふまえた思想を展開した。後述するようにベルジャーエフもロスキーも、ソローキンと同じく1920年代にプラハにのがれた亡命ロシア知識人であった。

したがって西洋の諸科学との格闘と批判的接合の試みにより、ロシアの思想と学問は成熟していった。それは過度に「科学的」知識を求める無味乾燥な学術を戒め、〈善く生きる〉共同体を模索し、創出する学問を作ろうとするプロジェクトであったといえるだろう。利他的ソポールノスチか利己的西洋個人主義かという二者択一をせまるのではなく、〈善く生きる〉ための基盤であるソポールノスチ共同体を生み出す限りにおいて、利己的個人と利他的個人の双方は認められたのである。利他的共同体なりソポールノスチなりを無批判に受容したのではない。自分本位となった利他的行動が時として災いを引き起こすことがある。しかしソポールノスチを支える共同主観性は、その災いを食い止める働きをすることで、何とか利他主義の弊害を切り抜ける機能を果たしている。

第二に明らかにしなければならない論点というのは、社会学史の枠組みにおいて、社会主義時代に諸外国へ亡命した社会学者たちに焦点を当てるとのことである。上記のベルジャーエフやロスキーといった思想ないし哲学の分野の学者であれば、ソポールノスチ概念を直接的に思弁的に扱うことができたであろう。しかし社会学者は、そういうわけにはいかない。社会学者として、ソポールノスチを〈善く生きる〉ための社会を構築する上での理想型概念として用いた。したがってソポールノスチは、彼らの社会学の方法論ないし理論体系の中に入り込んでいると考えられる。取り上げるべき社会学者としては、下記のような人物が挙げられよう。独立直後のポーランドへと移ったロシア系ユダヤ人ペトラジツキー（Leon Petrażycki, 1867-1931）は、法学と心理学を講じた学者である。ポーランドのみならず、世界の法社会学に影響を与えた。彼の根本的な考え方としては、社会現象の内実は客観的ではなく、心理的・主観的なものであるという点にある。また直観、あるいは道徳性を強調していることでも知られている。

他には、メンシェビキの活動家でもあったギュルヴィッチ（Georges Gurvitch, 1894-1965）がいる。彼はフランスへ渡ったあと、「深さの社会

学」を提唱し、世界的に著名な社会学者となった。彼の社会学の中にもやはり、社会現象を人間の深層意識との平行関係ととらえようとする発想がうかがえる。

ロシア貴族の出身で、ソローキンと同様にアメリカへと渡ったティマシェフ（Николай Сергеевич Тимашев, 1886-1970）もまた、亡命ロシア知識人であった。彼らの仕事にはソポールノスチという考え方において類縁性が見て取れる。彼らにはロシアで生まれ育ったあと、亡命生活を余儀なくされたという体験から得られた同時代認識があった。それは、行き過ぎた利己主義的世界への危機感である（上記ペトラジツキーはその絶望感もあつてか、鬱をわずらい自殺している）。しかしそれと同時に、逆説的ながらそうした時代だからこそ、利他的共同体の実現可能性が増大していくとも、彼らは固く信じていた（Timasheff, 1957; Sorokin, 1950）。

そして第三の論点としたいのは、上記のようなロシアのソポールノスチ思想、それが亡命知識人の手により国外へと運び出され、結果として〈善く生きる〉ための社会学が欧米社会の中に浸透していった、というグローバルな社会学史の流れを明らかにするということである。社会学者を含む知識人の多くがプラハやベルリンやワルシャワを経由し、フランスやアメリカなどに本拠地を構えるにいたったという事実が、追跡調査の拠点となるところだろう。特にロシア革命による亡命や、ロシアや中欧・東欧からのユダヤ人ディアスポラによる欧米の学問世界への貢献がここで取り上げるべき対象となる。

4. ソローキンから〈善く生きる〉ための社会学へ

ロシア・スラヴ思想の根底にあるソポールノスチは、どのような形でロシア社会学の中に取り込まれ、〈善く生きる〉ための社会学として形成されようとしているのであろうか。アメリカ社会学会利他主義セクションもその試みの1つであるが、〈善く生きる〉ための社会学は、いままさに形成の途上にあるといってもよい。その社会学の構想を、P.A.ソローキン研究の立場から捉えなおすことが、本節の課題である。亡命ロシア知識人という観点からソローキンおよび彼の周辺にいたロシアの社会学者たちの仕事を振り返ってみると、きわめて興味深い事実が明らかとなってくる。

まず注目したいのは、20世紀初頭のロシアの人文・社会科学である。そこには〈善く生きる〉た

めの社会学の原型といえる「主観派」社会学があったからである(J.F. Hecker, 1934, *Russian Sociology: A Contribution to The History of Sociological Thought and Theory*)。ロシア固有の社会学とされる主観派社会学は、ロシア農民への啓蒙活動であるナロードニキ運動との影響関係が濃厚である。この派に属するラヴロフ(Петр Лаврович Лавров 1823-1900)やミハイロフスキー(Николай Константинович Михайловский, 1842-1904)は、ナロードニキ運動の理論的指導者でもあった。その意味でソボルノスチとの親和性が高い(実際に彼は著作の中でソボルノスチ概念を多用している)。彼らが重視したのは、人間は意思によって歴史を作ることができるという基本的な立場である。これには、人間の歴史というものを、当時流行した予定調和的な社会進化論による説明から救い出そうとする意図があった(ミハイロフスキー『進歩とは何か(Что такое прогресс?)』)。意識が社会文化を形成するという、前節の第二の論点と重なり合う部分である。

だが残念なことにその主観派社会学は、特に1917年以降の客観派社会学の台頭によって、後退せざるを得なかった。客観派社会学の一部は唯物論的 sociology へと合流して行く。ロシア・マルクス主義の父とされるプレハーノフ(Георгий Валентинович Плеханов, 1856-1918)やストルーヴェ(Петр Бернгардович Струве, 1870-1944)がこの学派に属している。1920年代前後の、ソローキンと同時代を生きたロシア社会学者たちの課題は、この対立を乗り越え、統一的な視座を獲得することにあった。ソローキンのロシア時代の代表作『社会学体系』は、その白眉である(吉野, 2002)。

ちなみにストルーヴェとソローキンは知己の間柄であった。息子グレープ・ストルーヴェ(Gleb Petrovich Struve, 1898-1981)は、プラハ亡命生活をともにしたソローキンの手書きの原稿を英訳している。それは、ソローキンがアメリカで最初に発表する著作『革命の社会学』(Sorokin, 1925)であった。

主観派社会学に属する人々や客観派社会学の一部は、ロシア革命の結果、ロシア国内での活動を制限された。その多くは死刑の宣告や国外追放という憂き目にあった。1922年には、いわゆる「哲学者の蒸気船」によって、大量の知識人が国外に脱出した。主観派社会学が継承されなかったのは

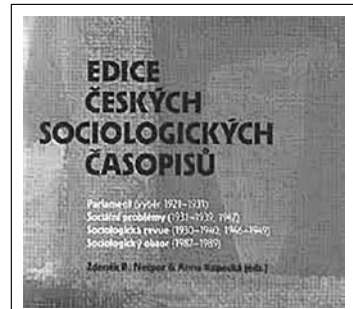
そのためである。

しかしロシア革命による亡命者の受け皿となった国、とりわけチェコスロヴァキアでは事情は違っていた。マサリク(Tomáš Garrigue Masaryk, 1850-1937)のいわゆる「ロシア・アクト」

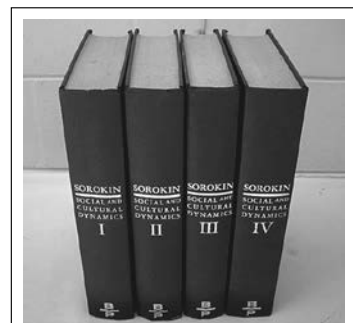
による亡命者の受け入れ政策の結果、彼らのプロジェクトは命脈を保ったのである。これは筆者自身が、実際に現地調査を行ってみて分かったことであるが、亡命ロシア知識人による文書が、プラハのアーカイブに多数残されている。しかしそれらは1948年のチェコスロヴァキア政変により共産主義体制となったため、ほとんど顧みられることはなくなってしまっていて、なかば放置された状態にあった。1980年代までの社会主義全盛の時代に「ブルジョア科学」として、イデオロギー的に切り捨てられてしまったものもある。共産主義革命に反対して国を逃れてきた亡命ロシア人の著述など、読むに値しないと考えられたからであろう。幸運なことに、拙稿で示したとおり、チェコでは社会主義崩壊後の学問と思想の見直しによって、それらを掘り起こそうとする取り組みがようやく実を結びつつある(吉野, 2018b)。これらの成果が明るみに出されれば、本仮説の検証作業を力強く後押ししてくれるものとなるだろう。

上記のような問題を、ソローキンに限定すると、次のように整理できるだろう。ソローキンには、近年になって全貌が明らかにされつつあるロシア時代の著作のほか、いまだアーカイブに埋もれたままになって

いるプラハでの著作がある。そしてプラハのロシア人サークルのもとを離れて、アメリカに渡り、華々しく活躍した。ロシアでの事跡はロシア人の手により、アメリカでの事跡はアメリカ人の手に



DVD「チェコ社会学雑誌集成」(2011年)。これまで忘れられていたチェコの社会学系の雑誌テキストの集成。亡命知識人の記事も多数収録。



ソローキンの主著『社会的・文化的動学』(1937-1941)。全4巻、3000ページに及ぶ。ハーバードの大学院生のほか、多くの亡命知識人の協力を得て完成された。

より詳細な発掘と紹介とが進められつつある。そうした作業を遂行している著述家として、ここでは特に2名の重要な人物を挙げておこう。1人はロシアのドイコフ (Юрий Всеволодович Дойков, 1955-)、もう1人はアメリカのスミス (Roger W. Smith) である。いずれもアカデミックな世界ではなく、フリーの研究者である。断簡零墨にいたるまで掘り起こそうとする、彼らの地道な発掘作業によって、初めて日の目を見ることとなったソローキンの仕事は少なくない。これらのソローキンの仕事を総合することによって、ようやく〈善く生きる〉ための社会学の源流をロシアに探り、その思想のスラヴ圏への浸透、そして欧米の社会学への直接的、間接的な輸入という流れを、一例として示しうるものとなるだろう。

たしかにこれはソローキン一人の事例研究に過ぎないかもしれない。本稿で示した仮説を裏付けるためには、論証のための証拠を増やしていく必要がある。したがってその次の作業としては、ソローキンの人生と多少なりとも重なり合う社会学者、わけてもペトラジツキー、ギェルヴィッチ、ティマシェフといった人々のたどった足取りを探ることで事例を増やしていくことが必要となる。加えてソローキンの主著『社会的・文化的動学』(Sorokin, 1973-1941)に挙がっている、有名無名の共同研究者たちのことを忘れてはならない。その中には、著名な音楽家クセヴィツキー (Serge Koussevitzky, 1874-1951)、ユーラシア主義者サヴィツキー (Петр Николаевич Савицкий, 1895-1968)、軍事理論家ゴローヴィン (Головин Николай Николаевич, 1875-1944) の名前さえ含まれている。ロシア人の知的サークルは、地理的にも分野的にも広範囲にわたっているという事実が、ありありと浮かび上がってくるはずである。ソローキンおよび彼の周辺にいた亡命ロシア知識人たちの中には、プラハでその生涯を閉じたものもいれば、他国へ移住したものもいる。彼らの境遇とソローキンその他の、成功を収めた上記のような学者たちとの比較もまた、本仮説の裏づけとなる素材を提供するはずである。

亡命ロシア知識人たちの知的営為は、彼らがより切実だと考えた問題とも、深いところで通じている (サークルの内部ではより強固に共有されている)。彼らは歴史に翻弄されながらも、〈善く生きる〉ために歴史に立ち向かっていった。そして「故郷喪失 (Heimatlosigkeit)」の感情を抱きながら生涯を閉じたのである。しかし、

そうであるがゆえに、かえって〈善く生きる〉ための社会学というのは、一国内の閉ざされた社会ではなく、グローバルな世界に開かれた社会学となっているのである。

5. 世界の社会学への伝播の見取り図

以下では、仮説検証の具体的な作業内容 (調査対象) となるべき、ロシア社会学の世界の社会学への流入経路を示す見取り図を描き出しておくことにしたい。

(1) ロシア社会学

ここでは広い意味でのロシア社会学の系譜を整理しておくことが必要である。具体的には、文豪トルストイやドストエフスキ (Фёдор Михайлович Достоевский, 1821-1881) による愛や神と共同体についての思索はロシア社会学の具



イサエフ著『社会学の問題—エゴイズム、友誼、階級利害』(1906年刊)

体的な事例としても読み替えるものである。例えばソローキンにも、トルストイを論じた仕事が存在する。また博物学者クロポトキンによる相互扶助の思想は、スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) 以降の進化論的 sociology に対抗する意味合いを持っている。さらに社会学者イサエフ (Андрей Алексеевич Исаев, 1851-1924) は、より直接的に利己主義と利他主義に関する議論を展開している。あるいは神経生理学者ベフテレフ (Владимир Михайлович Бехтерев, 1857-1927) の共感反射学の研究も、利他的な心情を実証的、実験的に明らかにするという意味でたいへん興味深い。彼らの中には、明らかに、〈善く生きる〉ための社会学の原型を探し出すことができるはずである。さらにそれだけではない。それらの原型を摂取したその後の世代に属する社会学者たち、わけても海外へと流出していった学者たちへの継承と発展の過程を描き出すことは、本仮説の検証にとっては必要不可欠な作業となろう。

(2) チェコスロヴァキア社会学

1917年以降、多くのロシア人が、亡命によって諸外国へ流出していった歴史的事実を確認する必

要がある。特に重要なのは、チェコスロヴァキアへの流入である。マサリクの「ロシア・アクト」により、大量の亡命ロシア知識人がチェコスロヴァキアで活躍をした。プラハを始めとする主要な都市では、ロシア人大学が作られ、ロシア語の新聞、雑誌の講読が可能であった。現在でもロシア正教の教会の墓地を訪れると、ロシア系チェコ人の墓石を確認することができる。

チェコスロヴァキア社会学史を、チェコの文化と学術世界に多大なる影響をあたえ亡命ロシア知識人の観点から整理することは今後、ますます重要な課題となってくるだろう。社会学者の中では特に亡命ロシア人との親密な関わりの強かったブラハ (Inocenc Arnošt Bláha, 1879-1960) は、逸することができない。マサリクの直弟子であったブラハは、「ブルノ学派」を形成し、チェコスロヴァキア社会学の1つの系譜を形作った。彼の後継者には、アントニン (Vaněk Antonín, 1932-1996) やスメタンカ (Václav Smetánka, 1886-?) らがいた。ブルノ学派社会学の特徴の1つは、倫理的志向の強さにある。ブラハは労働社会学や農村社会学など、労働者と農民へのエンパワーメントを目指した社会学者であったが、その際には共感や倫理ということがキーワードとなっている。

(3) 中欧・東欧の社会学

やや扱いにくいのが、旧東ドイツ・オーストリア・ポーランドなどの社会学である。オーストリア＝ハンガリー帝国解体前から、解体後の各国の社会学の継承と断絶の問題があるからである。しかも亡命知識人についてもかなり複雑である。例えばユダヤ人のマンハイムを見てみると、ブタペストで生まれた彼は、フライブルク、ベルリン、パリ、ハイデルベルクなどを転々とし、最終的にはロンドンでその生涯を閉じている。いうまでもなく、ベルリンはパリやプラハと並んで亡命ロシア人を受け容れ、ロシア人コミュニティが形成された土地であった。

この中で比較的扱いやすいのは、ポーランドであろう。この国は、ユダヤ系ロシア人に対する吸引力が強かったことが知られている。先述のペトラジツキーの系譜を探ることが、手がかりとなるだろう。ロシア人ではないが、ユダヤ系の亡命知識人ということでは、ズナニエツキ (Florian Witold Znaniecki, 1882-1958) の態度・価値の理論やマリノフスキー (Bronisław Kasper Malinowski, 1884-1942) の贈与論に、

あるいはオーストリアではシュッツ (Alfred Schütz, 1899-1959) からバーガー (Peter Ludwig Berger, 1929-2017)、ルックマン (Thomas Luckmann, 1927-2016) などの現象学的社会学の系譜に、〈善く生きる〉ための社会学の要素が読み取れる。彼らがいかなる知的な背景をもっているのかを確認することで、ロシア思想との何らかの接点が見出せるかもしれない。なお現象学的社会学の父祖ともいえるフッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) は、オーストリア帝国のプロスニッツ (現チェコ共和国) に生まれたドイツの社会学者であったこと、1936年に刊行された彼の『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』はウィーンとプラハでの講演原稿をもとに書かれていたことなどは、間接的ながら本仮説の検証とも関わる注目に値する事実である。

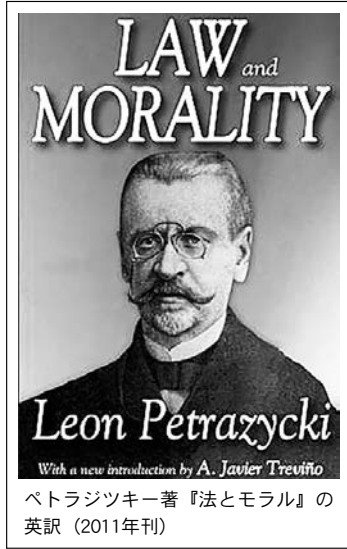
(4) フランス社会学

まずは主としてフランス語で著述した、デュルケーム学派社会学者に属するドロベルチについていうと、その社会的連帯とソポールノスチとの間にある共通点を指摘することができるだろう。さらにロシアからフランスに亡命してきた学者ベルジャーエフ、ギュルヴィッチ、ロスキー、ストルーヴェなどの仕事の掘り起こしは、〈善く生きる〉ための社会学のヨーロッパへの移入を考える上で、欠かすことのできない課題である。その際に着眼すべきは、フランスへの移入経路である。フランスに落ち着く前にも、いくつかの土地でネットワークを形成した。そのネットワークを通じて、また次の地域に移るという事例が少なくないからである。ベルジャーエフ、ギュルヴィッチ、ロスキー、ストルーヴェらは、プラハやベルリンなどを経由している。彼らの考え方が、フランス社会学でどのように受容されてきたのかを明らかにすることで、遠くソポールノスチにまでさかのぼりうる、何らかの痕跡を発見することが可能となる。またさらに、フランス社会学の中から生まれてきた諸概念、例えば人類教、道徳社会学などとソポールノスチとの親和性を明らかにすることができれば、上記のロシア人たちがフランスを始めとする欧米の社会学で、比較的容易に受け容れられた理由をつきとめる手がかりとなるだろう。

(5) アメリカ社会学

アメリカでロシア出身の社会学者たちが、どのような受け容れられ方をしたのか。そのことを考えることで、現代社会学の1つの中心となってい

るアメリカ社会学の動向を考える上で、思わぬ視点を提供してくれるのではないだろうか。ティマシェフは法社会学をアメリカに浸透させたが、彼はペトラジツキーの教え子であった。またソローキンと利他主義セクションとの関係も、因縁浅からぬものがある。これらの亡命ロシア知識人に加えて付随的ながら、ユダヤ系亡命知識人が受容した同時代のアメリカ社会学の動向、および彼らがアメリカ社会学に与えた影響を明らかにすることで、亡命知識人の社会学の、より包括的な見取り図が完成されるだろう。



結論 〈善く生きる〉ための社会学とは

本稿の目的は、ロシアから亡命した社会学者たちが、行く先々で知的ネットワークを形成し、学術的成果を残したその運動の総体を遠望してみると、〈善く生きる〉ための社会学という構想が浮かび上がってくるのではないかと、ということを見取り図として描き出すことにあった。20世紀初頭のロシアには〈善く生きる〉ための社会学があり、それが亡命知識人により世界各地に持ち出され、書き残された断片が、世界各地に眠っている。それらを本稿で示したような行程表に従い、グローバルな社会学史の文脈の中で再構成することによって、来るべき〈善く生きる〉ための社会学の構築が可能となるだろう。

社会主義体制以前のロシアの社会学には愛や倫理や利他主義を科学的に探求する分野が形成されていたことは紛れもない事実である。しかし、これまでのロシアおよび中欧・東欧の社会学史に限っていうと、ソ連および衛星諸国の共産主義体制と脱共産主義運動に関わらせたものが多かった。他方、中欧・東欧のドイツ語圏の社会学史に関心を示すことがあっても、それらはスラヴ世界とは全く切り離されたドイツ語圏内の社会学として片付けられてきた。その結果、歴史の中に埋没し、忘れられつつあるのが、ロシア、中欧・東欧の20世紀のグローバルな社会学史であり、亡命知

識人論ではなかつたろうか。

人間が生きる上で必要なものは、衣食住ばかりではない。生きがい、愛、喜びといった人間のポジティブな意識と、その意識が生み出す社会と文化とが必要である。人間には、それができるのである。ソクラテスは、人はただ生きるのではなく、善く生きることを説いた。聖書には「人はパンのみに生きるにあらず」という言葉がある。人間は単なる動物ではなくそれ以上の存在である。人間と動物とは、どう違うのか。自分と自分の周りに住む人々とともに、よりよい生活を築いていこうという意志、そこに動物が持っていない、人間固有の特性があらわれている。であるからこそ、人間はいかに悲惨な状況に置かれていたとしても、ポジティブな意識を生み出そうとし、それを可能とする社会の構築を希ってきた。そうしたポジティブな意識と社会を生み出すことを目的とする科学、それが〈善く生きる〉ための社会学である。

亡命社会学者たちが現代社会学にどのような寄与をなしたのか。そのことを明らかにすることで、一国内の社会学史あるいは一社会学者のモノグラフでは見えてこなかった、グローバルな運動体としての〈善く生きる〉ための社会学の形成過程を解明できるだろう。

※ 本研究は科研費基盤研究 (C)「研究課題：初期ソローキン社会学にみる利他主義研究の萌芽―ロシア時代の未公刊・新資料の分析」(16K04043) の助成を受けたものである。

参考文献

- コーザー、ルイス・A.、1988、『亡命知識人とアメリカ―その影響とその経験』岩波書店。
 フェルミ、ローラ、1972、『二十世紀の民族移動 (亡命の現代史1・2)』みすず書房。
 Giddens, A., Sutton, P.W., 2017, *Sociology*, 8th ed., Polity Press.
 石川晃弘、1969、『マルクス主義社会学―ソ連と東欧における社会学の展開』紀伊國屋書店。
 Janák, Dušan, et al., 2014, *The Beginnings of Sociology in Central Europe*, Praha—Sociologické nakladatelství (SLON).
 Jeffries, V. ed., 2014, *The Palgrave Handbook of Altruism, Morality, and Social Solidarity*:

- Formulating a Field of Study*, Palgrave Macmillan.
- ジェイ、マーティン、1989、『永遠の亡命者たち—知識人の移住と思想の運命』新曜社。
- Ломоносова, М.В., 2016, «Предтеча» Питирима Сорокина. Автобиографический романсоциолога, вовлеченного в водоворот политики (=ピティリム・ソローキン『先駆者』—政治の渦に巻き込まれた社会学者の自伝的小説) // Социологические исследования, № 5.С.134-140.
- 前川玲子、2014、『亡命知識人たちのアメリカ』世界思想社。
- Motyka, Krzysztof, 1993, *Wpływ Leona Petrażyckiego na polską teorię i socjologię prawa*, Lublin: Redakcja Wydawnictw Katolickiego Uniwersytetu Lubelskiego.
- Сорокин П. А., 1914 [=2000], “Л. Н. Толстой как философ,” *О русской общественной мысли*. СПб.: Алетейя, с.150-166. (= 2016, 吉野浩司訳、「翻訳 П・А・ソローキン「哲学者としてのЛ・Н・トルストイ」」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』第14巻第1号、pp.53-65).
- Sorokin, P.A., 1925, *The Sociology of Revolution*, J.B. Lippincott.
- , 1937-1941, *Social and Cultural Dynamics*, American Book Company.
- , 1950, *Social Philosophies of An Age Of Crisis*, Beacon Press.
- Timasheff, N.S., 1957, *Sociological Theory*, Random House.
- 矢沢修次郎、1996、『アメリカ知識人の思想—ニューヨーク社会学者の群像 単行本』東京大学出版会。
- 吉野浩司、2002、「P.A. ソローキンの相互作用論—『社会学体系』第4章を中心に」『一橋研究』第27巻第1号、pp.65-82.
- 、2006、「P. A. ソローキンの戦争社会学—利他主義による対立物の一致」、新原道信他編『地球情報社会と社会運動—同時代のリフレクシブ・ソシオロジー』ハーベスト社、pp.81-99.
- 、2009、『意識と存在の社会学—P. A. ソローキンの統合主義の思想』昭和堂。
- 、2014、「妙好人は体制に順応するだけ
の存在か—機能主義社会学による第十八願の分析を通じて」『韓国日本近代学研究』(韓国日本近代学会) 第43号、pp.255-276.
- 、2016、「〈研究動向〉「長い旅路」のはじまり—ロシア・コミ共和国におけるソローキン研究動向を中心に」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第14巻第1号、pp.71-83.
- 、2017、「アメリカ社会学会における利他主義セクションの可能性：P.A.ソローキンの統合主義社会学の視点が投げかけるもの」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』第15巻第1号、pp. 23-31.
- 、2018a、「P・A・ソローキン「哲学者としてのトルストイ」の社会学的意義：利他主義が必要とされる根拠をめぐって」『社会学史研究』第40巻、pp. 73-92.
- 、2018b、「1920年代の亡命ロシア知識人とチェコスロヴァキア社会学：P.A.ソローキン『長い旅路』第3部をめぐる現地調査」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第16巻第1号、pp. 53-70.